

# 生徒の興味・関心を高める音楽科の指導

研究指導主事 金子博和

Kaneko Hirokazu

## 要 旨

音楽科の教育は、西洋音楽中心の教育から、我が国の音楽をはじめとした様々な地域の幅広い音楽を学び親しむ教育へと大きく変わってきた。しかし、読譜指導法は西洋音楽中心の手法が多く、読譜が苦手な子どもたちにとっては日ごろの授業の中で音楽活動を楽しむことは難しい。本稿では、子どもたちが楽しい音楽活動を展開できるように、記譜法や表現領域の指導法の在り方について考察した。

キーワード： 発見、記譜法、コードネーム

## 1 はじめに

五線紙を用いた西洋音楽的な記譜法は、音高、リズム、和声の変化を合理的に記すことができ、演奏すべき内容を正確に伝えることができる。しかし、読譜に必要な多くのルールを覚える必要があるため表現領域の指導の中では万能であるとはいえない。また、歌唱や器楽においても西洋音楽的な記譜法を用いた楽譜を読むことから指導を始めた場合、音楽は好きだが読譜が苦手なので音楽の授業が楽しくないと感じる子どもたちが増えてしまうことが考えられる。子どもたちが音楽体験の積み重ねの中で多くの成功体験を得られるように表現領域の指導法を改善していくことは、音楽活動を楽しめるものにしていくために必要であると考えられる。

## 2 研究目的

読譜や歌唱・演奏指導の在り方を考察し、生徒の興味・関心を高めるための音楽科の指導法を探る。

## 3 研究方法

- (1) 表現領域における指導の在り方の考察。
- (2) 音楽の本質をとらえた教材づくりの考察。

## 4 研究内容と考察

### (1) 音から音楽へ


#### ア 歌遊びとわらべ唄

音には、規則正しくかつ一定の周期をもつ振動が、継続して起こる場合の音である楽音と、不規則な振動あるいは互いに関係のない周期をもつ振動が同時に起こる場合の音である雑音がある。人の歌声や旋律楽器の音は楽音に分類されるが、話し声や打楽器の音の分類は難しい。音には高さ、強さ、音色などの要素があり、話し声はある一定の規則性の中で高さの違う音を順次組み合わせたときに歌となる。それに対して打楽器の音は、雑音の性質を残したまま音楽の中に取り込まれていく場合が多い。また、ヒップホップ音楽ではラップの部分等で話し声を雑音の性質を残したまま音楽に活かしていく例も多く見られる。

7音で構成されている西洋音楽に多く使用されている長音階や短音階で作られた音楽よりも、我が国をはじめとした多くの国や地域で伝承されてきた5音で構成されている音階で作られた音楽は、半音を含まないため歌唱しやすく、幼児期や小学校低学年の、教科書においても多く取り扱われている。しかし、日本の各地で伝承されているわらべ唄は、単純で素朴な旋律をもちながら日常の言葉と結びつき、言葉の抑揚やイントネーションを反映させている部分が多く見られ、譜例1のように、2つの音や3音などの音を音階構成音として作られている曲が多い。これらは言葉の抑揚が音程の変化に変わっていったものだと考えられる。


譜例1

だるまさんがころんだ




だ る ま さ ん が こ ろ ん だ

あした天気になあれ



あ し た て ん き に な あ れ

どれにしようかな



ど れ に し ょ う か な か み さ ま の ゆ う と お り

これら以外に「じゃんけん」や「数え歌」などに同様のメロディをつけている例も子どもたちの遊びの中に多く見られる。これらは時代や地域により音高やリズムが変化することも多く、自然に伝承されてきたと考えられる。これらの生活に密着した歌遊びから5音音階を用いた歌唱教材に移行していくことは歌に対する苦手意識を作ることなく歌唱表現ができる一つの方法であると考えられる。

## イ 鍵盤楽器の新たな可能性

ほとんどのピアノや鍵盤ハーモニカの鍵盤は、西洋音楽における長音階が演奏しやすいようになっており、ハ長調の構成音と、それ以外の音は鍵盤の色や位置が分けられている。鍵盤楽器の初期指導においては、まず『ド』の位置からハ長調の構成音を順次覚え、それぞれの音を使った音楽を演奏している場合が多い。しかし、小学校低学年で取り扱う歌唱教材は「うみ」、「とんび」、「こいのぼり」、「茶摘み」のようにハ長調の構成音以外の黒い鍵盤だけで演奏できる曲が多い。しかし、これらを五線譜を用いて黒い鍵盤で弾くためには嬰へ長調や変ホ短調に移調する必要があり読譜も非常に難しい。しかし、楽譜を見たり、音名を書いたものを見たりして演奏せずに、黒い鍵盤を使って弾ける曲を探すという方法で鍵盤楽器を用いた場合、これらの曲を容易に探し出すことができる。

また、黒い鍵盤では、日本の陽旋法で作られた曲が演奏できるだけでなく、「北国の春」や「函

館の人」等のヨナ抜き音階で作られた演歌やスコットランド民謡の「蛍の光」のような様々な国や地域の民謡も探しだすことができ、演奏もできる。近代のポピュラー音楽においても「昴」は、黒い鍵盤だけで構成された五音音階を用いた曲である。黒い鍵盤をさわり、音を組み合わせることにより、様々な時代や地域の曲のメロディーを容易に発見できる。

鍵盤楽器の習熟には多くの練習時間が必要なので、その壁を越えることができずに鍵盤楽器を好きになれない児童・生徒は多い。しかし、この「発見」を通じて、演奏表現するために使われることが多かった鍵盤楽器を、音楽を発見するために使うという新たな可能性を見だし、「ピアノを習っていないから鍵盤楽器は苦手」という子どもたちを抵抗なく鍵盤ハーモニカなどに親しませることができるのではないだろうか。

## (2) リズム記譜法の工夫

「リズム感が良い。」「リズム感が悪い。」という言葉は、よく使われる。しかし音楽におけるリズムとは時間の流れの中で、いつ何をするかということであり、決して感覚だけで表現できるものではない。時刻を表すものに短針長針を使用した時計と数字が画面に現れるデジタル時計等の種類があるように、音楽におけるリズムも西洋音楽的な五線譜以外の記譜法を用いることによって様々な理解の仕方ができるのではないかと考えられる。

リズムは五線譜の中で、符頭や符尾の変化で表現される。4拍子等の規則的な拍子で作られた楽曲を細かいリズムまで合理的に伝えることができる記譜法であるが、符頭と符尾の二つの要素を組み合わせる演奏するタイミングや長さを表す記譜法であるため、楽譜を見て直感的に演奏することは難しい。



家庭用や携帯用のゲーム機で遊ぶことのできる音楽系のゲームでは、リズムを画面のスクロールを利用した平面的な位置関係や動きで記され容易にリズムを理解し演奏することができる。そのような考え方を活かし譜例2のような表を作成し、リズムを表現すると時間の流れの中で、いつ何を演奏するかが理解しやすくなる。

譜例 2

**8ビート**

	1	2	3	4	1	2	3	4
ハイハット シンバル	○	○	○	○	○	○	○	○
スネア ドラム		○		○		○		○
ベース ドラム	○		○		○		○	

箏の楽譜やコンピュータ上で音楽を作成する場合の編集画面も譜例2に近い考え方で作られている。このような均等に時間の流れが表現された表を使って合奏する場合、いつ、どのパートと

一緒にタイミングで演奏するのかが分かりやすく、相互鑑賞もしやすくなる。

### (3) 伴奏法の工夫

#### ア コードネームの理解と演奏

ピアノ伴奏が苦手なので音楽の指導に自信がもてないという声を聞くことが多い。ピアノ伴奏は、多くの芸術歌曲において楽曲の一部であると考えられ、伴奏譜を正確に演奏することは必要である。しかし、歌のみが伝承されてきた楽曲や近現代のポピュラー音楽では正式な伴奏譜が存在することは少なく、楽譜どおりに正確に演奏する必要はないと考えられる。その場合、伴奏時に必要なことは、正しい和声と歌いやすいリズムの表現である。近現代のポピュラー音楽の楽譜は伴奏譜が添付されることよりも、コードネームが記される場合が多く、コードネームの理解は近現代のポピュラー音楽の伴奏の演奏に欠かすことはできない。

コードネームの種類は多く、長三和音であるメジャーコードや短三和音のマイナーコード以外にも基本となる三和音や四和音に副音程の音を含めた多種多様なテンションコードと呼ばれる構成音の多い和音がある。そのため作曲時に指定されたコードネームを正確に使用して楽曲を演奏することは難しい。しかし、使用されている和音をメジャーコードやマイナーコードなどの必要最小限の和音にまとめ展開型を使わずに演奏すると容易に伴奏できる。また、エレキギターの演奏で使用される和音の第三音を省略して演奏する譜例3のようなパワーコードと呼ばれる和音の演奏法をピアノ伴奏に導入すると、より伴奏はしやすくなる。

譜例 3

パワーコード

#### イ 歌いやすい伴奏のための工夫

譜例4の[A]や譜例5の[B]の部分は、次のフレーズを元気な声で歌うためにタイミング良く息つぎをして、次のフレーズに備える部分である。しかし、伴奏譜では細かい音符を使った次のフレーズにつなげるための音がかかれていたため、伴奏者はピアノ演奏に神経を集中するが多い。指揮者がいて、舞台上で演奏する場合は、[A]や[B]の部分を楽譜どおりに演奏することは効果的で、演奏の緊張感を高めリズムを持続させる役割を果たす。しかし、日々の授業では多くの指導者がこれらの部分を鍵盤を見ながら演奏しなくてはならず、子どもたちから目を離すことになる。そのため指導者が生徒と一緒に大きく息継ぎをしたり、次のフレーズの歌唱に備えたりすることは

難しい。

譜例 4

ゆかいなまきば

小林幹治 作詞  
アメリカ民謡

いちろうさんのまきばで イーアイイーアイ オー おや  
ないてるのはまきばで イーアイイーアイ オー

譜例 5

虫のこえ

文部省唱歌

あれまつむしが ないてい る

この部分では、伴奏譜どおりに演奏することよりも「さん、はい。」等の声かけをすることを優先するほうが子どもたちのリズムは持続し息継ぎもしやすい。歌いやすくするためにはどうしたらいいかという視点で伴奏譜を見直し、子どもたちにとっての歌いやすさを考えて楽譜を考えることは、歌唱指導の在り方を見直すことや音楽づくりの指導法を考えることにもつながる。

## 5 おわりに

子どもたちが理論や記譜法を理解してから歌唱や演奏するためには、多くの時間が必要である。そのため演奏や歌唱をする前に音楽に対する苦手意識をもってしまうこともある。しかし、まず歌唱や演奏を体験させ、その中での様々な発見や成功体験をさせることが音楽を好きになることにつながる。また、その経過を音楽理論や記譜法の理解に活かすことは、読譜力を高めることになる。

楽曲を演奏したり聴いたりすることは、それ自体が目標ではなく、教育の中での音楽的活動が生

涯を通じて音楽を愛好するための土台作りとなることが求められている。今後も、子どもたちが音楽の授業での様々な活動の中から多くのことを発見するために、どのような指導が必要かを研究していく必要がある。

#### **参考文献・HP**

- (1) 山県茂太郎（1964）『音楽通論』 pp. 9-15.
- (2) 日本芸術文化振興会「文化デジタルライブラリー」  
<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>